教育における反抗と対応

佐野朝男

一

カール・ビューラー（Bühler, Karl）は、子どもの反抗について、これを第一反抗期と第二反抗期に分けた。発達心理学では、この手法を採って、幼児期に見られる子どもの反抗的傾向を第一反抗期とし、青年前期に見られる反抗的傾向を第二反抗期と呼んでいる。

ビューラーによれば、第一反抗期は意志の原初的な現われであって、目標の明確でない動きである。与えられたものや指示されたものに対して「イヤ」だというが、それでは何を欲するか明確でない拒否的態度である。そこでは拒否し反対することが第一義的なことで、その理由はあとからさがすことがある。時には、同じことがらに対してイエスかノーかはっきりいうことがある。この場合子どもには、おとなが欲するものは子どもにとっても欲求する価値がある。禁止されたものも欲求するに値するという一種の価値観が体験されはじめたものだと考えられる。

ある時期から、急に反対や拒否を表明することに、おとなは一種の驚きを感じる。二～三歳までは、子どもが好ま

しくないと思うことを親が察知して、その関心をほかに向けることができる。それが突然できなくなる時がくる。それは子どもが前から心の中で予定していたことを親が急に反対の指示をした場合である。この頃になると、子どもの手をひいてやろうとする親の手を払いのけようとすることもあるし、階段のあがり下りに抱いてもらうのを拒否して自分でやり直したりする。また、明確に約束しないのに、子どもがそう思いこんでいることに、反対の指示をすると強い反抗や拒否があらわれる。

こうした幼児期の反抗は、身体的な発達にもとづく自発的な自由活動の増進に伴う無意識的、無反省的な自己肯定と、自発性、自主性の反映である。というのである。

ある若い心理学者は第一反抗期を次のように説明している。幼児期に見られる親への反抗は、自我の目ざめといわれている。自分の欲求が何であり、何を求めているかがはっきりしてくる。そして多くの場合、欲求をはばんでいるもの親であることを知る。親のいうことを拒否したり、だだをこねて自分の欲求を通そうとする。個人的欲求の充足を妨げている社会、そのエージェントは親である。幼児は親を通して社会に反抗しているわけであるが、社会の存在には気づいていない。幼児の側からみれば、あくまで親に反抗しているのである。

とくに最近の母親は、自分の子どもは自分の思う通りに育てられると信じているように思える。たしかに第一反抗期を迎えるまでは子どもはきわめて無力であり、身体も小さいので、母親の思うがままに扱える。泣いても乳首をふくませれば泣きやむであろうし、だだをこねても抱き上げてしまえばなんとかなった。第一反抗期を迎えると、母親の自信は多少ぐらついてくる。こんなはずではなかったという感じであろう。子どもというものはもっとすなおで、親のいうことをきくものであると考えている。ところが、ひとたび反抗的になると、うちの子は子どもの理想像からはずれている。わたしのしつけが悪いのかしらと反省したり、どうしたらよいかと悩んだり、時にはむきになって感

情的に叱りとばしたりしてみる。

二つの叙述のなかで、前者によれば、この期の反抗は目標が明確でなく、何を欲するかが明らかでない拒否的態度であるといい、後者によれば、自分の欲求が何であるかがはっきりしていて、これをはばんでいるものが親であるから、親のいうことを拒否したり、だだをこねたりするのだという。これは全く相反することのようであるが実際には二つとも事実である。時には無目標であり、時には目標も意図も明確である場合がある。ただ後者でいうような、親の背後に社会があり、その社会への反抗だとするのは考えすぎだというべきだろうと思う。共通していることは、あどけない、そして何もいえなかったし、何もできなかった子どもが、はっきり反抗的態度に出るということは「自我の目醒め」ということである。

二

自我の意識に目醒めるということはどういうことであろうか。どうした経過でそうなるのか、自我の意識とはどうした仕組みであるかという解明が深く掘り下げられていないのが、今までの心理学的解明の共通的欠陥かと思う。

そこで、われわれは、これを意識の根源である人間の脳細胞の組織と、その発達過程に解明を求めてみようと思う。

マクロ的に見た人間の脳の発達については、スキャモン（R. E. Scammon）の成長曲線がこれを示している。これによると、赤ん坊の脳の重さは生れたときは三七〇—四〇〇グラムで男女ともほとんど違わない。この重さは体重の約一〇パーセントであるが、生後の脳の発達の速度は、身体の発達よりもずっと早く、六ケ月で生れたときの二倍になり、七、八歳で大人の重さの九〇パーセントに達する。それからは、ゆっくり大きくなってゆき、男は二〇歳、女では一八—一九歳で完成する。

このように、生れてからの脳は急速度で大きくなるが、各部分が一様に大きくなるのではない。部位によって発達の仕方が違っている。アドルフ・ポルトマン（A. Portmann）が「生理的早産」といって説明したように、動物はすべて小脳、脳幹、大脳辺縁系の古皮質、旧皮質における「生きるための脳」が発達して生れてくる。動物の場合は、ほぼ完成に近い発達をして生れてくるので、生れるとすぐ立って歩いたり餌を食べることができる。しかし人間はこの点では未成熟で生れてくるので、自分で立つことはおろか、食べることすら満足にはできない。それを動物並みにするためには、母の胎内に二十一ヶ月あって、脳の発達をまって生れてこなければならない。というのがいわゆる「生理的早産」なのである。

人間は、生きることのほかに、いろいろのものを記憶し、思考し、判断し、意慾して自分の行動をおこしていく。つまり考えることのできる動物であるが、この「考えるための脳」は新皮質と称する部分である。これは動物にはくらべものにならぬほどの広さと量とをもつ組織で、外界からの刺激を視覚、聴覚、触覚その他の受容器でうけとめ、これを貯えたり、選択して行動に移す機能を有するものである。この新皮質は殆ど白紙の如き未完成の状態で生れてくる。

神経系を構成するものは。神経細胞とグリヤ細胞と血管であるが、働きの主体は神経細胞である。その神経細胞は、フォン・エコノモ（von Economo）の推算によると約百四〇億（一三、六五三、〇〇〇）であって、大人の脳細胞と同じ数である。生れたとき既にこの数があり、終生増加しないし、損傷しても補充されたり再生されることがない。

大人の脳は体重の二・二パーセント、日本人の平均値では男は一、三五〇―一、四〇〇グラム、女では一、二〇〇―一、二五〇グラム、この数字からみて、大人の脳の重量と子どもの七八歳以後の脳の重量の差があまり大きくないことがわかる。

脳の重量が大人になって以上のような数値になるといっても、脳を構成する神経細胞が増すのではない。脳細胞は、胎児の時期に分裂増殖していて、生れてからは全然増さないのである。それでは、何が脳を大きくし、重くさせているのであろうか、それは細胞体から出ている樹状突起と軸索がのびていくからである。すなわち、シナプス連結と髄鞘化（Myelinization）によって脳は生長し、その働きをするのである。この神経細胞は体の他の細胞と異り、横の連系がとれないうちは何の働きをしない性質をもっている。だから数だけは大人と同じであっても赤ん坊の時は何の働きもしないのである。アリストテレスが、人は生れたときは白紙だ（Tabula rasa）といったのはこの事情を指すものといえる。

脳の発達を理解するために、簡単に脳細胞の構造を説明しなければならない。神経細胞は細胞体とそれから伸びる突起からできている。突起には二種類あって、その一つは樹状突起（deudrite）と呼ばれる比較的短い突起で、細胞体から数本ないし十数本でている。そしてその突端が多数の枝に分れている。

もう一つの突起は一本で、樹状突起より細く、長いものでは一―二メートルに及ぶものもある。これを軸索とよび、側枝を多数出して分枝している。軸索の周囲がリポイド性のエミリンの髄鞘で包まれていく。これは軸索の中を通る神経活動が、まわりに拡がらないように絶縁体の役目をするものと考えられている。

神経細胞は、軸索や樹状突起によって、お互いに機能的連結ができて、はじめて活動することができる。脳の発達とはこのことをいうのである。

大脳皮質の神経細胞の発達は三段階で行われるとされている。生れてから三歳までを第一段階、四歳から一〇歳ぐらいまでを第二段階、一〇歳ごろまで急速にのび、それからは徐々に発達して成人に至るという。しかし第一段階のシナプス連結と第二段階のシナプス連結する神経細胞とは、場所（脳細胞の部位）もちがい働きも同じではない。

フレキシヒ（P. Flechsig）が調べたところでは、運動や感覚をつかさどる神経細胞や、精神活動でも比較的単純なものは早いが、高等な精神活動を営むところの髄鞘化はずっとあとになる。

彼は髄鞘化の順序を示す脳地図を作り、その順序を一から四五までの番号で示しているが、たとえば知覚、認識、思考などをつかさどる頭頂、後頭連合野は三五番、三七番、四二番とし、視覚をつかさどる側頭葉を四四番とし、創造や感情、意志等をつかさどる前頭連合野は最後の四五番だとしている。

○歳から三歳ごろまでのシナプス連結は殆ど模倣である。赤ん坊に接している母親や保育者の言動や態度、また赤ん坊をとりまく家庭や保育所の環境が、この期の脳細胞の発達の唯一の指示者である。だから、この時期の赤ん坊に配線図を示してやれば、なにひとつ文句をいわないで、示された配線図通りにシナプス連結をする。この時期を模倣期と呼んでいる所以である。このごろでは茶の間にテレビ、ラジオを通じて社会が入り込んでくるから、配線図の指示者は家庭の人達や保育者だけではないといえる。

赤ちゃんは生後三ヶ月ごろから、大脳皮質の発達に支えられて、知的なことばを習う準備態勢ができる。喃語期を経て、自分で自分の声をまねる自己模倣期、十ヶ月頃から、意味のわからないままに他人の声をまねる他人模倣期にはいり、さらに成長するにつれて、意味を理解しながら話すことばの数がふえてくる。

年齢	言数 すの 話葉
1歳	5
1歳半	40
2歳	260
3歳	800
4歳	1,600
5歳	2,000
6歳	2,400

ことばの発達については、いろいろの調査がある。性別によってもちがい、環境によっても必ずしも同じではないが、大体次に示す図が平均的なものとされている。

この表で見るように、子どもは一歳では一年間に僅かに五語、一年半で漸く四〇語を覚える。そのなみなみならぬ模倣の努力がうかがえる。そして二歳になれば二六〇の「語い」を獲得するので、片こととながら自分の意志を発表することができる。三歳

になって八〇〇の「語い」をもつようになると、日常会話にはほとんど不自由がないようになる。

ことばを話すには、まず相手のことばをきき、その意味を理解しなければならない。そして、その理解のもとに、自分の考えを発想しその内容をことばとして組み立て、最後に発声器官の筋肉の統合的な働きによって、声の連鎖が作られ、話として相手に伝えることができるのである。これらの働きが、大脳皮質で営まれる精神活動であることはいうまでもないことであり、人間のみがもち得る精神活動でもある。ことばを理解する働きが営まれる領域は感覚性言語野といい、ことばを話すための筋肉運動の統合が営まれる領域を運動性言語野とよぶ。フレキシヒの脳地図によれば四〇番、四二番として、その発達はおそい方の部類に属している。

ことばを覚えることによって、こどもは、はじめて自己を知る。そして相手となる母親が、自分に対して他者だということを理解する。自我の意識が芽生えるというのはこのことをいうのである。それまでの子どもは、母に密着している。母を他者として認めるすべがなかったのである。ところが母との対話をし、母のいうことを理解し、これを判断するに至って、はじめて自分の意志で、これに答えることができるようになるのである。

三

われわれは、ながながと子どもにおける大脳の発達についての叙述をしてきた。その理由は、「自我の目ざめ」という意味を理解したかったからである。そして、一般には、きわめて無造作にいわれる自我の目ざめとは、このように人間の発達にとっては重大な、そして、なみなみならぬ努力の末に出来てくるものであることを理解しなければならない。

この理解にたつと、第一反抗期といわれる幼児期の反抗の意味がわかるように思う。そこで、この期の反抗が、子

どもの価値観と親の価値観との対立であるとか、幼児が社会のエージェントとしての親に反抗しているのだというような大袈裟なものだろうか、この時期の子どもの頭脳のなかに、確たる価値観が定着し、親や社会への批判的尺度が出来上っているとはどうも思えないもので、反抗という名に値しない反抗的言語の無造作な発表として受けとるべきではないだろうか。

この理解に役立つと思われるものに、仮性反抗として、ふつうは反抗と区別しているものがある。一見、反抗のように見えるが本来の反抗ではない。そして仮性反抗に二通りの種類があると説明されている。

その一つは、反応反抗と名づけられているものである。例えば、両親や先生のいうことが決して圧迫や干渉ではないのに、ほんの些細なことが本人にとって重大な侮辱に感じたり、または圧迫を意味する場合がある。そこで本人は立派な理由と考えて拒否したり抗争の態度に出る場合。

その二つは、反抗の姿を呈してはいるが、実際には反抗ではない、子どもは、反抗の態度をとるものの、心のうちでは反抗でない場合。これは、相手の気を引くため、わざと反抗的な様子を見せたり、わざとすねて見せたりするのである。おとなが自分にかまってくれていないと、子どもの方で思っている場合に、おとなの注意を自分に向けさせるために、このような態度を見せるのであるから、おとなが自分に関心をもってくれれば、それで目的を達したことになる。だから、いたわりのことばをかけられたり、甘い態度を示すとすぐ軟化してしまう。

子どもは、母は自分ひとりのものだと思っている。その母が自分から離れていくことは堪えがたいことなのである。だからこそ、時々母の注意を喚起しようとするのである。

これらのことを考えてみると、第一反抗期に現われる子どもの反抗的言辞や態度は多かれ少なかれ仮性反抗に似ているものではないだろうか。

というのは、脳細胞の発達過程から考えて、われわれ大人が考えるように、子どもに新しい価値観が生れ、親や社会に対する批判力ができたと考えることは過重評価ではないだろうかと考えざるを得ない。もちろん、この時期の子どもの反抗的態度は、ある種の欲求不満に原因することは考えられるところであるが、しかし、それがはっきりした目的意識にもとづくものではなくて、ビューラーのいうように「何を欲するか明確でない拒否的態度にすぎない。」と考えるべきであろう。つまり精神発達の一過程として見るべきで、あまり神経質に考えるべきではないと思う。

四

問題は親の対応である。

親はともすればわが子に対し過大な期待をもち勝ちなものである。親はある理想像をわが子の上に描き、もっと良い子であり、もっと素直な子であることを期待しているにもかかわらず、幼児期になって突如として反抗的になったわが子を見て驚くのである。そして理想像からはずれているわが子の態度に自分の教育の自信を喪失する。そして、わが子だけがこのように悪いと誤解して悩む場合が多い。

一般に親のわが子に対する理想像は、現実に子どもというもののレベルをはるかに越えている場合が多い。いわば期待が大きすぎるというべきであろう。いってみれば、子どもはどこの子どもも、殆ど同じようなものなのである。子どもの時代に思ったほど優劣のあるものではない。だから問題は子どもたち自身の上にあるのではなく、親のもっている理想の子ども像の上に大きな差があり問題があるというべきであろう。

子どもには誰でも同じように反抗期があるのだからといって、これを放置しておけばよいということにはならない。親の子どもに対する対応は、その子の将来に大きな影響を及ぼすことも考えなければならないことである。

子どもの反抗に対する親の対応についての大事なことは、まず、親が神経質にならないことである。そして、子どもは必ずしも自分が思うように育てられるものではないという反省が必要である。さればといって自信を喪失したり放任してよい筈はない。

反抗は精神発達の一過程として、さほど心配することはないものであるが、この機会を利用して、子どもの性格形成に役立てることは多い。

まず、がまんをするということ、欲求不満に耐える力を養うことが考えられる。子どもの欲求を何でもきいてやるということは、子どもを甘えさせることであって、子どもの自己本位や我利を通すクセを作るようなもので絶対にあってはならないことの一つである。さればといって、子どもの欲求を一切認めず子どもの意志を押えつけてしまうこともよくない。子どもの人生には長い社会生活が待っているのである。その社会生活に処していくためには、自己中心は許されないことを教える絶好の機会である。そして妥協ということも同時に教えたい。妥協が自己を喪うことではないこと、必ずしも卑劣な自己逃避でないことも、将来の社会生活への準備として身につけたいことである。

この期の子どもの反抗的態度や言辞の根本は、何よりも親と離れたくないことにある。親の関心が自分から去っていくことの淋しさが何より先にあって、親の注意を惹くためのいわゆる仮面的反抗も現われるものである。だから親は子どもの反抗をまともにうけとめて、怒ったり、叱りとばしたり、押えつけてしまうことではなくて、いつも子どもの心から離れていないのだ、忘れているのではないよ、という態度で、辛棒強く常にことばをかけてやる態度が必要である。

五

反抗という概念の辞書的解釈によれば「外的な権威または強制力に対し、無選択的に拒否的行動を示す場合の行動」とされている。この意味では、反抗とは異常な事例又は極端な行動として考えられている。

一般に反抗という心理現象に与えられている説明、換言すれば反抗の形成過程として考えられているものを列挙して見ると次のようなことである。

一、大人の権威を否定する形で現われる

青年前期になると、いわゆる自我の意識が確立し、それをもとにして自己の自立を実現しようとする。自分では「もう子どもではない」と思っている。親や教師もまた、時には「お前はもう子どもではない」と子どもを訓すことがある。しかし実際には、大人としての完全な自由や自立が与えられているわけではない。場合によっては、親や教師から、「子どものくせに」だとか「大人と同じように考えるのは未だ早い」ということばを投げかけられる。

これは彼等にとっては、まことに心外である。自主的人格や自律性の貴いことを教えたのは親や教師ではないか、それらを教えた親や教師によって、自己の内なる価値としての自主性が否定されることは、堪えがたき屈辱である。弱者として扱われる公憤として、強者たる親や教師の権威を否定する形が反抗となって現われる。

二、権威の失墜

強者に対する弱者の反発として反抗が起るとするならば、そのためには強者の力、または強者の権威が前提とならねばならない。その強者の権威とは何かといえば、子どもにとっては親であり教師である。

ところが、親は昔ながらの親ではない。それは、曽つては家督相続という特権に支えられて、家庭においては絶対的の権威として君臨していた家長としての権威は今やない。現代の家庭は、むしろ父親不在の家庭と変質し、父親が子どもに対し、倫理的尊厳なるものとして接触する機会も少なく、父もまた、自らの権威をもって家庭を統一する力

量にも欠けている者が多い。父親の家庭における地位は変質している。つまり、親の権威は昔ながらの権威ではなくなってしまったのである。

教師もまた今や師父的存在ではなくなった。それは一箇のサラリーマンであり、自ら労働者と名のって赤旗を振る存在である。ここにも子どもの尊敬の中心であった曽つての教師の権威は低下してしまっている。

子どもが自分の心の中に不満をもち、矛盾を感じたとして、親や教師がそれらを解決してくれるとは思えない。子どもにとっては、もってゆきどころのない不満や心の中にうっ積するもののはけ口として、頼るところを失ったのである。

三、価値観の変貌

青年期は誰しも進歩にあこがれ、理想的社会を夢みるものである。そして、理想社会の実現こそ彼等に課せられた使命であると信じる。学問をすれば、それは真理の追及であるとし、真理とは理想の実現であると考える。

ところが、彼らを取りまく社会は、彼らの目には腐敗堕落したものとしか映らない。その上今日の情報社会において、彼らの見、彼らの聞くものは、彼らの価値観に背離するものばかりであって、彼らは息苦しくなってくる。たまたま、現代社会の矛盾や罪悪や不合理を摘発した言説を耳にすれば、彼らは居ても立っても堪えられない心境になってくる。たちまち、こうしたものに同感し、難解な語句すらが有難い救世主の声のように響く。

そして、彼らの抱く理想の実現は、まず手始めに、悪の根源である現代社会を急進的な方法で一挙に変革しなければ救いがたいもののように感じてくる。そして、現代社会の掟である法律や道徳や、文化や慣習などは、彼らの価値観からすれば一顧に値しないものと映じてくる。そして、この社会を是認し、その存続に力を貸している彼らの親、教師などを仇敵のような存在と考えてくる。親や教師が彼らの理想の実現を阻んでいるが故に、これに反抗すること

が、彼らの使命達成の糸口であり、次いですべて現存するものを破壊し一挙に変革しなければ救いがたいものであると叫ぶようになる。

彼らは、現存するものの価値を否定するが彼らの理想とするものの青写真はない。そのスケヂュールは現代社会の破壊にあって、そのあとに理想の殿堂が自然に実現するかのように錯覚する。これが学生運動などに見る反抗の一つの類型である。

以上のような反抗の形成過程は一種の理念型であって、必ずしも現実的妥当性をもつものとはいえない。青年の価値観の変貌といっても知識の無秩序な吸収による結果ではあるが、その中には意識の浅い、単なる口説の徒であって堅い信念を欠くものの多いことも事実である。

心理学では、これを自我に醒める時期と呼び、この時期になると誰でも精神的に新しいもの、一層広いものに対して自分を開き、今までの生活環境から脱出すべき時に遭遇したと感じ、今までの自己を拘束し、規定してきたもの、周囲から価値ありとされてきたもののすべてに対し、否定と拒否と離反を試みようとするのが一般的な傾向である。そして、既成の社会に対し不満であるとともに、自分自身にも不満、嫌悪感をいだく、自己の容貌や自己の性質にすら不満をいだく者が多い。こうした自己否定は、実はその後にくる自己肯定の時期への一階程なのだが、彼ら自身はそれを知らない。

ビューラーは「青年の精神生活」の中でこの期の反抗を次のようにいう。

自由に現われてくる新しい、はじめは目標を欠いた意志エネルギーの過剰が無目的的なエネルギーの消耗と、どうにも手のつけられない青年の欲求を生み出した結果であって、目標のない否定としての反抗が起きる。そして青年の心身の、自分にはどうにもならない気分の変調が反抗の原因である。そして身体や心理的の不快、心身の不安、不調

状態がもとで、心の中に不均衡と心の中の争が、青年の粗野な反抗的態度の中に解消され、周囲の世界にはき捨てられるのだ。

六

われわれは第二反抗期といわれる青年前期における反抗の形成過程についての諸説をみてきた。それは理念的であって、具体的にはそれら一つの原因で反抗が起るものではなくて、復合的な要素で形成されるものであろうことは推測されることである。しかし、根本的にはこの期における自我意識の確立に基くものであることは共通的な要素である。

これに比して、第一反抗期と称せられる幼時期の反抗についてみると、これは自我意識とはいっても、それは未だ芽生えであって、はっきりとした自我の確立とか、理性による判断に基いたものではなく、多分に感情的、発作的、偶発的なところが見られる。

ビューラーは前者については、「意志の原初的な現われであって、目標の明確でない動き」であると、後者については、「青年の心身の、自分にはどうにもならない気分の変調が反抗の原因であって、無目的なエネルギーの消耗と、目標を欠いた意志エネルギーの過剰」をその形成の要素としている。つまりビューラーによれば、それらはいずれも無目的無目標な、単なる幼児期及び青年期の変調によるものだと片付けている。しかし、ここでも幼児期にくらべて青年期の自我の確立を前提としていることは認められる。

これらを併せ考えてみるに、反抗とはいっても幼児期のそれと青年期のそれとは全く異質なものだといわざるを得ない。反抗ということばのもつ意味に基けば、幼児期のそれは反抗という概念には遠い内容で、それは単に「母を呼

ぶ声」なのである。ただ人間の生長を通じて、三、四歳の頃となれば、誰にも現われてくる現象として、これを第一反抗期と名づけたものであり、青年前期に現われがちな共通の時期をとらえて、これを第二反抗期と名づけたものと考えられる。そしてこれらはいずれも個人的なものであって、環境や教育の差により、現われたり現われなかったりするもので、人生において必ず通過しなければならない関所のように考えるのは、多少、神経質であり、且つ観念的な所産ではないかと思われる。

そこで、これらの時期の幼児及青年に対する教育的対応にも異るものがあって然るべきではないか。前者に対しては幼児の母に対する呼び声に応ずる母の愛情と、親としての態度が答えれば足るものではないか。但し現代の家庭生活における親の子に対する態度と親の生活そのものに、その答えが充分であるか否かが問題である。

青年前期の反抗に対しては、その教育的対応は大いに考慮すべき点が多いと思われる。ということは、親の権威が失墜し、教師の品位が落ちたことがその原因の一つとして数えられる場合、たとえ時代の推移により家庭の構造のために、親の権威が奪われたとしても、又教師が、現代の管理社会において権威の存在形態が変ったため、権威が人格に体現することから組織の中に没入してしまったのだとしても、そのままで仕方がないといってすますべきものではない。親や教師の反省によって、そのあり方が問いなおさるべき時が来ているのである。また、一方では反抗は悪であるときめつけてよいものであろうか、なるほど、道徳の指導要領による徳目の一つに数えられてはいない。しかし青年の反抗の社会的意味を考えると、それは教育的価値の一つとして位置づけることができるものではないかと思われる。

反抗はマイナス面の多い行為である。しかしその中には教育的にはプラスに数えてもよい面がある。ということは反抗は個人的な場合もあるが、多くは連帯性をもつものである。若者の反抗には共通性がある。ひとりの反抗は他の

共感を呼ぶ場合が多い。学園紛争によく見られるところであるが、彼らの連帯感は、多くの場合自己の利害を超越している。彼らは、その連帯に対して忠誠をつくし、信義を守り、苦労を共にすることについては寧ろ宗教的信仰にも似たところがある。これこそは功利的なおとなの世界には見られないところであって、その倫理的価値は高く評価さるべきものである。

これを教育面に取り入れることはできないものであろうか。但し彼らは安々と狡知な教師の網にはなかなかかからない。よく教師が使うことばであるが、「君たちのいうことはよくわかる」といった安価な見えすいた同調的なことばは、かえって反撥を呼ぶものである。彼らが改革理論をふりかざしてくるならば、教師は堂々とその理論闘争に立ちむかうべきである。懐柔的態度や圧迫的態度は、彼らの闘志をかりたてるばかりであり、逃避的態度は彼らの軽蔑を買うのみである。

しかし、こうはいっても、それには対話が必要である。理論闘争ということは彼らの理論的根拠を前提とする。彼らに一貫した理論がなく、対話に応じようという姿勢のない反抗については、処置なしというより外はないが、必要条件である対話の慣習は突嗟にはできない。反抗に対する教育的対応のためには、平素の対話的ムード作りが用意されていて、はじめて効果的なことである。

親も教師も、この世の中に満足しているものではない。不満もあるし、社会の矛盾も欠陥もよく知っている。決して今のままの社会を肯定し、その社会のエージェントとして、反抗する青年に立向って行こうなど考えているものではない。しかし何十年かをこの社会に適応してきたし、この社会の中にあって将来の見透しをもった生活もしている。この社会をどうすればよい社会にすることが可能かということは喙の黄色い青年よりも、もっとよく知っている筈である。

反抗する青年をおとなのレベルにおいて考えることは必要な一面もあるが、実は彼らがまだ未熟であるという事実は、対応の態度において考うべきことである。彼らも、この段階を越えれば、次に自己肯定の時期がくる。その時期へのひとつの過程として反抗の時期があるのであって、この時期こそ彼らを社会化するためには好時期だといえる。

青年も二〇代に入ると、彼らは法的には一人前であり、それぞれ職業をもつことになる。その時は、自分がおとなの仲間入りをしていることに気づく。親も教師もその時は反抗の対象ではなく仲間である。そして彼らの後からは、曽つて自分がそうであったような反抗期の後輩が続いてくることに気づくことであろう。また、彼らが、よき親、よき教師によって、自分の反抗をどのように扱われたかを気付くことであろう。親や教師のよき対応によって自分が社会から「ひねくれ者」だとか、「彼は反抗的だ」と仲間外れにならなかったことに改めて感謝の気持を感じるにちがいない。

その時、曽つての反抗耐性というものが、よりよき社会改革への連帯、忠誠と結びつくとしたら、反抗にも倫理的価値を認めてもよいことになろう。

シュプランガー（E. Spranger）が、反抗の青年に対して次のようにいっている。

「お前は自分の危険を覚悟で、ギリギリのところまでは自分のあやまちをするがよい。いよいよのところに来たら、わたしはお前の保護をしなければならない。――お前がわたしを求めさえすれば、いつでもお前たちのために、ここに居るよ。」